

社会情報学部での3年間を振り返って

Reminiscences of my three years at the Faculty of Social Information,
Sapporo Gakuin University

秋山 雅彦

1. はじめに

1999年3月24日、長野県松本市から送った5トンコンテナ2個がA館に横付けられ、ダンボールに詰め込まれた書籍類がA414研究室へ運び込まれた。2002年3月までの3年間、札幌学院大学での教育・研究の生活が始まることになった。

信州大学理学部地質科学科での10年間の教員生活を最後に、国家公務員としての定年を迎えた後、社会情報学部の勝井義雄教授の後任として札幌学院大学に採用された。東京教育大学に1952年に入学してから、同大学、ついで北海道大学を含めると、国立大学での生活は47年にも及ぶ長い期間であった。私立大学での非常勤講師の経験はあったにしても、私立大学での専任教員は初めての経験となった。さらに、これまでの長い理系の大学から文系総合大学ということもあって、すべてが新鮮であった。

1年間の見習い期間を経て、2000年の4月から定年退職までの2年間は、思いがけず社会情報学部長という職務を引き受けることになり、これはさらに新鮮な体験となった(秋山, 2002)。無我夢中で過ごした3年間は長い3年間であったという感想を抱いている。通常はあっという間に過ぎてしまったところであろうが、そのような感想とと

もに、長かったとする感想のほうが強いように思われる。私なりに充実した教員生活だったということだったのだろうか。

定年退職に際して、社会情報学部では「最終講話」として、他大学で言う最終講義に相当する講演を行い、その内容を紀要に掲載することが恒例となっている。私の場合には、僅か3年間ということもあって、退職講話とは名づけず、2002年3月6日(木)に開催された社会情報学部研究会の2001年度最後のプログラムに加えていただいた。この報告は当日1時間の講演内容に、その後の経過を加えてまとめたものである。

2. 教育のこと

2.1 共通教育での担当講義

共通教育の自然科学担当教員の所属は社会情報学部という決まりになっていたことから、地球科学担当教員とし採用になった私は、社会情報学部所属となった。昼間部の担当科目は総合講義(C)と総合講義(D)で、商学部第二部(夜間)の自然科学概論とゼミナールの4コマを担当した。2000年度からはカリキュラム改定にともなって、総合講義は「地球環境変遷史」と「生物進化と地球環境」とに名称が変更されることになった。そして、学部長職に就いたことから、担当科目は昼間部の2科目だけに減らされてしまった。

2.2 授業風景

商学部第二部の担当講義は1年で終わってしまったので、印象は強くない。しかし、学生の勉学への姿勢は大きく二つに分かれていた。きわめて熱心で、目の輝きをまぶしく感じた学生のグループと単位だけのために通ってくるという態度の学生グループとである。前者の学生は驚くほどしっかりした答案を作ってくれた。もう少し、講義を続けて持ちたいという気持ちを抱いたのも、前者のような学生が居たからであった。

ここでは、3年間担当した昼間部の担当講義について述べてみたい。大教室での100～250人規模の講義は、信州大学の共通教育で経験はしていた。その時期から講義時間の最後を使って、質問を学生に書いてもらう授業方式をとっていた。学生の理解の程度を知るだけでなく、自分自身の講義内容を反省するための有効な方式であると考えていた。札幌学院大学では田中一先生がすでにこの方式をとって成功しておられた。この方式は「質問方式による会話型教育」と呼ばれている(田中, 1999)。多人数教育ではきわめて有効な方式ではあるが、毎週の提出文書は300枚を越すことになり、それを読みこなし、そして質問事項への回答を準備することは大変な労力を必要とすることになる。毎回の講義に寄せられた質問に対して、その解答をプリントして渡して欲しいという、至極もったもな意見を何人かの学生からもらっていたが、それに応えることはできないで終わってしまった。

毎回の講義で実行したことは、その日の講義内容の要旨をのべ、講義での獲得目標を述べることであった。京都議定書、コージェネレーションなど、話題になっている問題を導入として取り上げることは学生から歓迎されていた。

講義中の私語はどこの大学の教師も悩まされていることである。私語禁止、講義中での

飲食は禁止するということは、シラバスの中に書くとともに授業中にも繰り返し警告しておいた。3年間の最後まで毎時間、私語する学生へ警告しなければならなかった。教室からつまみ出すとは宣言していたものの、一度もしなかったのはけしからん、という意見が学生の質問書に書かれることが多かった。大学生に対して、何回にもわたって怒鳴りつけるということは、一般の学生にとっても愉快なことではなかったであろう。怒鳴る当人も不愉快な思いに駆られたものだった。しかし、多くの学生からは、先生の授業は静かで集中できるという意見が寄せられ、好意的に受け取られていた、と考えている。昨年受講した地学と内容が同じという学生が数人いたが、取り上げ方が違うということが理解できていなかったようだ。

傑作なのは、テストの日程を間違えて、持ち込み許可をされていた資料も何もなく、「裸一貫でテストを受けた私をお笑い下さい」(法学部2年)という答案であった。しかし、良くできていた。また、出題の意図が理解できない学生が多いのには驚かされた。

板書についての意見は何人もの学生から来ていた。黒板には単語だけを書くのではなく、文章として書いてほしい、あとでノートを見て意味が分からないことが多いという意見である。大学生としてのノートの取り方が分からないことを意味している。難聴という障害をもった学生がノートテーカーのノートを見ても、自分のノートとあまり変わらない、と嘆いていたことの意味がよく分かるというものであろう。

期末試験で、講義内容の論評を問うたのに対して、一度も出席しなかった学生がいかにも出席したかのような論評を加えていたのは噴飯ものであった。また、出題の仕方が偏っていて、自分のように全体の勉強してきたものにとっては不公平だ、という文句を言う学生がいた。何のための勉強だろうか。しか

も、勉強したという割には出来が悪い。

誤字・脱字が多く、これでも大学生かと思う学生が決して少なくなかった。文章を書く機会が少なく、たとえ書く場合であってもワープロを使うことになると、漢字をかけなくなるのは無理のないことである。自分の経験からも分かる。気になった誤字として、損石（隕石）、体積（堆積）、感心（関心）、以外（意外）、講議・構議（講義）、批准（批准）、構目（項目）、見当（検討）、余有はない（余裕はない）などが挙げられる。その他、よく見受けられた「私的には」という語は気になって仕方がなかった。

質問書の中に、次のような嬉しい記述があった。

- ①京都議定書など授業でならったことがニュースに流れると注意して聞くようになった。夏休みには本を読もう。授業の始めにその日に扱う内容を説明してくれたのが良かった。
- ②恋人の専門分野と重なり彼の研究を理解することができた。
- ③地球は本当に美しい、生きていることはすばらしい、感動と興奮の嵐、ふと空を見上げたとき、地球の歴史を思い出す。

2.3 Natureの紹介と嬉しい反応

社会情報学部の学生に向けて、年2回発行のコミュニケーション・サイクルという印刷物がある。2000年11月22日発行のコミュニケーション・サイクルに次の文を投稿した。ここに転載させていただく。

私は現在、共通教育の講義として「地球環境変遷史」と「生物進化と地球環境」の2コマを担当しています。聴講している学生は社会情報学部の学生が2割程度、あとは他の4学部の学生です。毎時間の講義のあとで、5分程度の時間を使って「質問書」を書いてもらい、それを平常点として期末試験の採点に加算しています。学期末になっての平常点の最高は100点満点の40点近くになっています。講義の

なかでビデオやOHPを多く使うように努力しているため、それらの情報をぼんやりと流されてしまうことのないように、「質問書」の紙面に私の方からの質問にも答えてもらうことにしています。興味を持って集中してくれる学生が少なくないことを知って、嬉しく思っている昨今です。

先日、「地下深部の岩石から生きているバクテリア発見」との報告が「Nature」誌に掲載されました。それはボーリングによって地下569mから得られた古生代二畳紀の地層中のバクテリアで、培養することによって2億5000万年間の眠りから覚めた、というのです。それが本当なら、まさにビッグ・ニュースです。インターネットでそれを読んだ学生が、私の研究室のポストにその記事のコピーを入れて知らせてくれました。私がたまたま研究室（A414）を留守にしていたため、そのコピーには「おもしろい記事を見つけました」という添え書きがしてありました。

「Nature」というのはイギリスの科学週刊誌で、アメリカの「Science」誌とともに世界の科学者から最も広く読まれていることで知られています。「Nature」には、幸いなことに、日本版があり目次とアブストラクトの日本語訳が巻頭のページに載せられています。大学の図書館で購入しているので、最先端の科学研究を知るのに最も優れた雑誌である、と学生諸君には講義の折りに何度も紹介しています。そして、その中から関連した記事をなるべく講義の中に織り込むように努めて、学生諸君には「Nature」を一度は開いてみるように薦めています。時々、学生からこんなおもしろい記事がありました、と学内の廊下で出会ったときに話しかけられ、非常に嬉しい思いをさせてもらっています。

つねづね私は、大学とは知的好奇心を活性化させてくれる場で、また知的好奇心に応えてくれる場でもあると言い続けています。本学は地球科学や地球環境学の専門家を教育する場ではなくても、諸君がそれらに関心をもち続けることのできる知的好奇心に満ちた若者に育てていって欲しいと願っているところです。（2000年11月24日）

2.4 恐竜化石の専門家の講義を織り込んだ特別プログラム

2002年9月に新潟で「硬組織の石灰化」に関する国際会議が開催された。その会議終了後にイギリス Sheffield 大学の古生物学者 Martin A. Whyte 博士が札幌を訪ね、我が家に数日間、滞在してくれることになった。彼の札幌滞在が終わって東京に戻るのが、水曜日となっていた。私の講義は火曜日で、シラバスのなかに「化石が教えていること」が含まれていたもので、その前の「最古の化石の証拠」と入れ替えることにした。そして、その講義の中に彼の研究成果である「イギリスのジュラ紀恐竜の足跡化石」の講演を織り込んでもらうこととした。

講演は30分、恐竜の足跡化石から何が分かるか。その後の時間を使って、イギリスの大学制度、とくに年間の授業制度について話していただいた。講義の終了前に、受講の学生からいつもの質問書を提出してもらった。学生から提出された「質問と感想」をまとめると、次のようになる。

2.4.1 Whyte博士へ質問

この道に進んだ動機は、研究は何歳から。今、化石で熱い国は、恐竜の足跡化石はどの位発見されていて、何種類くらいですか。化石の捏造をどのように考えているか。化石を発見したら、まず何をするのか。年代はどのように分かるのか。化石が残る条件は、何%位が化石になるのか。化石のある場所をどのようにして見つけるのか。3本以上の指を持つ恐竜はいるか。恐竜の皮膚の色は（授業終了後、この質問に答えて戴いた）。恐竜の寿命は、何故足跡の研究をするのか、体の部分の方が面白いと思うが、4つ足の恐竜の走り方は馬のようですか、それとも犬のようか。足跡の化石から何故肉食か草食か区別できるのか。一度に何匹の子供が産まれるのか。草食と肉食ではどちらが多かったのか。恐竜化石の命名の仕方は、恐竜は何種類居たのか。イースターの休みって何ですか。休み中はイギリスの学生もバイト

に明け暮れるのか。学生に宿題は毎日出されるのか。卒業に必要な単位は240単位とのことだが、ひとつの授業で得られる単位数は、イギリスでは大学祭などはあるのか。

2.4.2 感想

とてもよい経験、何回でも、全く新しい知識なので、友人に話して上げたい。先生はテレビにでていし、博士と友達であることから改めて尊敬。興味を持った、ジュラシックパークのビデオを見てみよう。外国の大学とかを見学してみたい。モチベーションが上がった。恐竜の走る速さとかが学べてよかった。外国の先生を招いての講義は興味深い。英語はほとんど聞き取れなかったが、このような機会をこれからも作って欲しい。恐竜には興味があったので、授業にでてよかった。恐竜の卵の中に赤ちゃんが入っているのには驚いた。とても新鮮だった。イギリスの大学制度が日本と違うのに驚かされた。風邪を引いていたので休もうかなと思ったが、出席してよかった。圧倒された。貴重な体験だった。画期的な授業のあり方。英語力が無く悔しい限りでした。直接お礼が言えないので、この場で有り難うございました。英語は聞き易く、よく分かった。英語力を養って、自分の力で理解できるようにしたい。聞き易い英語だったので、よく分かった（英語英米文学科、臨床心理学科）。恐竜の話をするときのマーチン先生の顔は真剣で、本当に恐竜が好きなんだと感じた。このような研究はロマンティックだ。HPを是非開いてみたい。先生の説明が入って、英語がぶつ切れになったのが残念。Thank you for your interesting speech. I have been interested in dinosaurs. リスニングの勉強にもなってよかった。普段より楽しかった。足跡の化石は面白い。外国語での講義を聴く機会がないのでよかった。時間の経つのを忘れるほどだった。弟が恐竜大好きで、彼に聞かせて上げられず残念。同時通訳の方がわかりやすい。卵の化石は新しい発見だった。妹がイギリスに留学しているので、イギリスのことが聞けてよかった。

2.4.3 Whyte先生からの回答

上記の質問のうち Whyte 先生から回答をもらった方がよいと考えられる質問を選び、電子メールで回答していただいた。その回答の専門語には訳語を加え、プリント No.7 として学生全員に配布した。そのプリントを下記に転載する。

質問1 Why and when did you have interests in fossils?

As far back as I can remember I always had interests in the environment including both plants and animals as well as landscape, climate and geology(地質). Though my interests as a child lay perhaps more with biology I do remember reading books on geology(地質学), looking at and copying geological maps and being fascinated by geological displays in museums. I also remember very clearly a family holiday (at Berwick-on-Tweed) on which I found my first fossils - lower Carboniferous (石炭紀前期の) plants and corals. When I went to University I originally intended to study biology and only took geology as a subsidiary subject. It however soon became obvious that I found this far more interesting and stimulating and so I transferred on to the Honours geology course and went on to do a PhD in paleontology(古生物学). I like to think of myself as a palaeoenvironmentalist (古環境学者) and think that this is important because it is only if we can understand what has happened to environments and life in the past that we can firstly properly understand the present environment and how we are affecting it and secondly make good predictions about what might happen in the future.

質問2 Dinosaurs (恐竜) usually have 3 fingers. Were there any dinosaurs more than 3 fingers? Dinosaurs appear to have been derived from animals with 5 fingers(手の指) and 5 toes (足の指). But many dinosaur groups show reduction of either or both toes and fingers. One group which

retain 5 toes are the sauropods (竜脚類). Ceratopsian (角竜類) and prosauropod(原竜脚類) dinosaurs had four toes. Most other groups of Theropod(竜盤類) and Ornithopod(鳥盤類) show further reduction to 3 functional toes though in some groups the fourth toe remains as a vestigial feature (退化した形態).

質問3 How long individual dinosaurs lived? (the span of life)

Different dinosaur types would have had different life spans with smaller forms having shorter life spans of a few years and larger forms living longer. There has been much debate about the life spans of the largest sauropod dinosaurs especially as it relates to whether they were hot-blooded or not. Studies of their bones show large numbers of growth lines and also that they were capable of quite fast growth compared to modern reptiles. Most workers seem to think that they reached maturity after about 20 years and may have lived as long as 70-100 years.

質問4 The style of running of dinosaur with four legs was like horse or dog?

The fastest dinosaurs were those that ran bipedally(二足で). Some ornithopods (鳥盤類) like Iguanodon probably moved quadrupedally (四足で) when moving slowly and browsing but rose on their hind legs for faster locomotion. The obligate quadrupeds like the sauropods (竜脚類) and the armoured dinosaurs(鎧竜)(stegosaurs, ankylosaurs and ceratopsians 角竜) were all rather heavy animals and it has been suggested that, like modern elephants, even when they were moving as fast as they could they never actually broke into a running gait (走り方). Interestingly one of our swimming dinosaur tracks was left by a bipedal(二足の) dinosaur which was swimming with a stroke that resembled the galloping gait of a horse(馬の全力疾走). So a normally bipedal animal retained the

limb coordination of a quadrupedal (四足の) animal.

質問5 How did you find the fossil localities of dinosaur tracks in England.

There are several books which list where dinosaur remains have been found in England. Dinosaur tracks (恐竜の足跡) were first definitely recorded from the middle Jurassic (Ravenscar Formation ラベンスカー層) of Yorkshire in 1906. However no scientific study of these tracks had been made until we began our work. In addition to finding track types that had not previously been recorded we have found that dinosaur tracks are much more common and widespread within the the Ravenscar group (層群) than had been previously recognised. Indeed they are the commonest and most characteristic feature of the whole succession. This means that by studying the different types and their distribution we will be able to deduce something about the dinosaur communities and their evolution during the middle Jurassic (ジュラ紀中期).

I hope that these answers are of help. If you need any further information I will be happy to try and give you it.

Dr Martin Whyte, Environmental and Geological Sciences, University of Sheffield, Dainton Building, Brookhill, Sheffield, S3 7HF.

<http://www.shef.ac.uk/uni/academic/D-H/es/STAFF20/whyte.html>

予告なしにイギリス人の講師を連れて行き、講義に参加してもらったことで、学生は驚いたらしい。しかし、結果は大成功で、学生は真剣な表情を見て安心した。「知的好奇心をもって欲しい」と繰り返して要請していた私は、学生の授業態度を見て嬉しく感じた。

このような授業形態を通常の授業に織り込むことの有効性は、予想通りであることを確認できた。国内外の来学者からの有益な貢献を期待できる。そのためには、年間を通して突然の来学者に対して対応できる予算を確保して欲しいものである。

2.5 社会情報学部の卒業研究発表会で感じたこと

社会情報学部の2001年度卒業研究発表会が2月1日と2日の2日間にわたって、E館の4教室を使って行われた。発表件数は211で、指導教員数は15名であるから、1教員あたり平均14名の学生指導ということになる。国立大学の5倍といった学生数である。

この発表会への参加は今年で2回目となった。昨年は赴任して最初の参加であった。Power Pointを使って、美しいプレゼンテーションに驚かされた。さすがは社会情報学部の学生であると感心したことであった。

プレゼンテーションは優秀だが中身がない、と昨年は悪口を言った。今年の卒業研究を聞いて感じたのは、指導教員のテーマの選択に成功の可否がかかっているということである。当たり前のことである。何しろ教員によっては20人からの学生指導を全く異なったテーマで指導するのは至難の技といえよう。というよりも、指導が行き届かぬことになるといった方が正しいだろう。統一的な課題に数人の学生が分担して当たるといったテーマの選択が不可欠であるといった感想をもった。新カリキュラムでは、卒業研究も選択科目となったことから、この種の問題は解決されるのかもしれない。しかし、卒業研究で得られる貴重な体験を経ないで卒業することになる学生には、それに代わる教育内容をどのように配置したらよいだろうか。

ところで、卒業研究と呼ぶからには研究でなければならない。ところが、多くはレポートの域を出ていない。レポート段階は3年生

の専門ゼミで到達し、それをうけての卒論であってほしい。もちろん卒業研究であるからには、そんなに高い研究は臨むことはできない。しかし、科学の研究であるからには、せめてどんなに小さなことであってもよい、井尻正二(1977)のいう論理的研究段階に到達して欲しいものである。そういった研究は今年の卒業研究には確かに認められる。希望はある。そのような期待に応えてくれる学生がもう少し多い数になって欲しいものである。

3. 研究のこと

3.1 堆積有機物の熟成度評価と石油成因論

札幌学院大学へ赴任した1999年に参加した有機地球化学の国際会議は、イスタンブールで9月に行われた。その会議で発表した研究課題は「石油の形成と顕微-FIRによるケロジェンのクラッキング反応機構」であった(Akiyama et al., 1999)。石油の形成過程の地質学的研究は信州大学理学部の10年間にわたって、学部の卒研生と修士課程の大学院生の研究テーマとしても実施してきた。上記国際会議の研究発表は信州大学での最後の時期に院生と取り組んだ研究課題であった。

地層の中に含まれている不溶性有機物はケロジェンと総称されている。そのケロジェンが地下深く埋没して加熱されると、化学結合が切断されて炭化水素をはじめとする各種の有機分子が排出される。このようにして排出された炭化水素が集積して形成されるのが、石油・天然ガス鉱床である。このときの切断エネルギーやその機構に関しては各種の研究が行われてきている。私たちは、顕微鏡下で赤外光を使ってその変化を観察・測定し、そのデータをもとにケロジェンから排出される炭化水素の形成機序とそのときに必要とされる切断エネルギーの算定を行った。その結果、これまでの常識とは異なって、低いエネルギーレベルでこの切断反応が起きているこ

とを明らかにした。

この研究は札幌学院大学での3年間の在職期間でさらに発展させる計画であった。1年目はその準備期間でその研究体制を整えたところであった。しかし、社会情報学部という私にとっては未知ともいえる分野を扱わざるを得なかったという困難さのために、上記の研究は諦めざるを得ないこととなってしまった。この辺の事情については、すでに札幌学院大学評論のCampus Profileで紹介していただいた(札幌学院大学評論, 2001)。

当時の学部が抱えていた課題は、学費の改定・全学生へのモバイル型パソコンの貸与・情報インフラ整備としての講義室の改修の3項目であった。それらの課題は私にとっては能力を超える困難なものではあったが、学部教員をはじめとする学内教職員の理解を得ながら、解決に向けて歩み始めることができたことは、嬉しい限りであった。

3.2 天然ガスに関する共同研究

研究課題の選定は自己のおかれた条件を生かすことができれば、それが最善の道である。文系総合大学では理系の実験室も実験器具もない。しかし、文系の優れた能力を持った教員組織があるのではないかと。私の石油地質学関連の課題で文系の教員と共同で追求できる課題は何かと考えたとき、日本最大のガス田である石油資源開発(株)の勇払ガス田と北海道ガス(株)の天然ガス転換事業に思い当たった。さらには、サハリンのガス田開発の成功を考慮すると、天然ガス開発が北海道経済に及ぼした影響、また今後の展望などが格好の研究課題となる、と考えるにいたった。

幸いにして、この計画に商学部・経済学部・社会情報学部の教員の賛同を得て、2000年度の研究準備期間を経て、2001年度札幌学院大学研究促進奨励金(共同研究)に応募した。幸い、研究委員会による審査をパスし、1年間の研究を実施することができた。

研究課題は「勇払ガス田開発が北海道の経済・社会に与えた影響についての予察的研究」であった。この研究は2002年度にも継続が認められ(研究代表者 山本純), 私は退職後もその研究に参加させていただいている。

4. 国立大学と私立大学の格差

4.1 学費と補助金のこと

大学へ交付される補助金は、国立大学と私立大学とでは大きく違っていることは当然かもしれない。しかし、大学の規模や専門性による条件でその額は大きく違ってくるので、比較はきわめて困難である。週刊「東洋経済」の「大学の特集」の中で扱われている1999年度の大学予算の比較では、学生一人当たりの額として算出されている(東洋経済編集部, 2001)。それによると、国立大学の平均予算は263.3万円で、国費・補助金の額は195.3万円であるのに対して、私立大学の平均予算は144.1万円で、国費・補助金の額はわずかに17.1万円である。国立大学は理系の社会情報学部が多いとはいっても、この額の違いはいかにも大きすぎる。

国立大学のなかでも大きな格差が認められる。学生一人当たりの国費・補助金は東京大学がもっとも高額で518.8万円であるのに対して、東北大学443.2万円、京都大学365.1万円、筑波大学373.8万円、北海道大学317.0万円、一橋大学139.7万円となっている。それに対して、私立大学では慶応義塾大学64.5万円を筆頭に、立命館大学32.6万円、日本大学28.0万円、早稲田大学21.8万円と続く。

同じような計算方法で、手元にある2001年度の資料から、道内5大学について学生一人当たりの補助金の額は表1ようになる。道内の私立大学で最高額を示す酪農学園大学であっても私学の全国平均17.1万円にも及ばず、札幌学院大学は残念ながら全国平均の3分の1を少し上回るに過ぎない。

札幌学院大学の場合、平成13年度入学生の授業料は社会情報学部を除く他の四学部へは、4年間で納入する額は3,532万円(年平均88.3万円)であるから、国費・補助金は納付額の7%に過ぎない計算になる。あまりにも少なすぎる額といわざるを得ない。

表1 2001年度の道内私立大学の国費・補助金

	総学生数	総額 (万円)	学生一人 当たり (万円)
酪農学園大学	4,312	60,863.1	14.1
北星学園大学	3,313	33,591.1	10.1
北海学園大学	8,534	61,273.4	7.2
札幌学院大学	5,492	33,897.1	6.2
札幌大学	6,377	38,711.1	6.1

4.2 私立大学と受託研究

私は信州大学理学部でS公団からの受託研究を行っていた。1999年4月に札幌学院大学に赴任してからも、その研究を継続したいと考え、公団研究所の担当者に相談したところ、所属はかわっても同じ研究課題での継続は可能とのことで、札幌学院大学学務課の研究担当者に相談をかけた。本学では道内の新聞社からの受託研究の経験はあるものの、公団との契約の経験はないとのことで、まずはそのフォーマット作りから始めた。

公団の研究担当者との相談の結果、信州大学での書式をそのまま使った契約書でよいことになり、受託研究申請書を提出した。いざ、公団研究所の所長と本学理事長との間での契約という段階になって、突如、公団の事務方から待たされた。その理由はつぎの3点であった。①契約者の順序が私立大学の場合には、国立大学とは違って、公団側が甲、大学側が乙となる。②公団から貸与を受けた機器類に関しては、破損した際には大学側が修理して返済すること(国立大学の場合には破損した機器類に関しては公団側で責任を持って修理するとなっていた)。③研究

終了後、機器の返済の際には送料は大学側でもつこと（国立大学の場合には公団側がもつこととなっていた）。

この受託研究では使用した機器類はすべて信州大学理学部所属のものであったため、公団との間で特に問題は起きることはなかったが、この契約書取り交わしの経過から、わが国における「官尊民卑」という不合理さを身にしみて感じざるを得なかった。

5. あとがき

本学に赴任する以前の10年間に過ごした長野県には、名所旧跡は少なくない。上田市の郊外、松本市の北に位置する別所温泉は「信州の鎌倉」として知られているところである。鎌倉時代末期の寺が建ち並び、私の最も好きな散策の場所でもあった。

信州の鎌倉といわれるだけあって、由緒ある寺が多い。八角三層の塔をもつ安楽寺（曹洞宗）もその一つである。寺の左手の入口をすぎると、すぐそこにその塔はある。小さく愛らしい佇まいである。寺の住職の好みなのか、寺の正面には住職の筆になると思われる次のような書のコピーが置かれ、幾ばくかの寄進で配布してくれていた。曰く「その一言が人の心を温める、その一言が人の心を傷つける」と。

この3月、本学での定年を迎えた今になって、これまでの人生で多くの人の心を傷つけ

てきたらしい私にとっては、きつい言葉である。温めたいとは思いつつ、そうではなかったらしい札幌学院大学での3年間に反省している昨今である。

それにしても、短いながら充実した社会情報学部での3年間は、私の人生にとって貴重な財産となっている。温かく支えてくださった社会情報学部の教員は勿論のこと札幌学院大学の全教職員の皆さんに厚く御礼申し上げます。

引用文献

- Akiyama, M., Morita, N., Tsuzuki, N. and Hatano, K. (1999) Oil generation and cracking kinetics of kerogen obtained by micro-FTIR spectroscopy. 19th Intern. Meeting of Organic Geochemistry, Istanbul 1999, Abstract 311-312
- 秋山雅彦 (2002) 社会情報学部では研究科設置をどのように考えてきたか『社会情報』Vol.11, No.2, 77-85
- 学院評論編集委員会 (2001) Campus Profile 秋山雅彦教授に聞く. 札幌学院大学評論, 24号, 36-39
- 井尻正二 (1977) 『新版 科学論』大月書店
- 田中 一 (1999) 『さよなら古い講義』北海道大学図書刊行会
- 東洋経済編集部 (2001) 『特集 本心に強い大学』週刊東洋経済2001/9/15特大号